

気象から見る『嵐が丘』

The Weather in *Wuthering Heights*

川崎 明子

要 旨

エミリー・ブロンテの『嵐が丘』には多様な気象が登場する。作品の比喩的な気象については早くから数多くの議論があるが、字義的気象に注目した研究は未だ少ない。そこで本論文は、エコクリティシズムの実践にヒントを得て、『嵐が丘』における気象を、字義的なものを起点として分析する。そうすることで、『嵐が丘』における実際の天気は、第一に現代社会に生きる私たちにとっての天気と大差がないこと、第二に比喩的な意味づけと不可分であることを明らかにする。本論文では、まず字義的な気象の役割と天気の比喩を観察する。次に字義的気象と比喩的気象が一体化した世界観を、キャサリン・アーンショーを中心に考察する。最後に、雪や雨がそこから降下してくる上空を、キリスト教の教義における天国という観点から分析し、キャサリン・アーンショーとヒースクリフの天国観が、根本的にキリスト教的な概念とは異なることを証明する。

キーワード

ブロンテ、『嵐が丘』、気象、天気、エコクリティシズム、キリスト教、天国

序：字義的気象と比喩的気象の不可分性

エミリー・ブロンテの『嵐が丘』には、嵐をはじめとする多様な気象が登場する¹⁾。有名小説を用いて子供が英語の語彙を学習する絵本シリーズにおいても、『嵐が丘』のテーマは「天気」(weather)である(Adams)²⁾。『嵐が丘』における比喩的な気象については、早くから議論がなされて

きた³⁾。例えば、Cecilは1934年に、嵐と風の原理を使ってプロットの解明を試みた(128-31)。Schorerは1949年に、「風景」(landscape)で起きる諸活動が人間的である場合、反対に人間が風景に似ている場合を例証した(545-47)。Millerも、キャサリンとヒースクリフの分離から生じた嵐が、神によって最後に風に変容すると考えている(205)。対照的に、『嵐が丘』における実際の気象を分析し、語りにおける機能や、登場人物の思想との関係を論じた研究は少ない。そこで本論文は、エコクリティシズムの実践にヒントを得て、気象を字義通り考察することを起点とした。エコクリティシズムの手法は多様で、唯一普遍のモデルがあるわけではないが(Barry 248)、本論文では、自然を文化的構築物や比喩としてのみならず実在の現象として捉える姿勢(Barry 243; Garrard 10, 16)を特に参考にした。その結果、二点が明らかとなった。第一に、嵐が丘における実際の気象は、現代社会に生きる我々にとっての気象と大差がないこと。第二に、『嵐が丘』における大気中の諸現象は、比喩的な意味と分ち難く結びつき、キャサリン・アンショーの世界観にまで発展していることである。つまり、出発点を字義的気象に限定することで、逆説的に、『嵐が丘』から比喩的気象を排除することが困難であることが判明した。結果として本論文は、上に挙げた古典的な批評に回帰する格好となり、議論の半分以上が実質的に『嵐が丘』の思想的考察となっている。しかし、海老根がいうように、現在この小説の思想的研究があまり注目されないにしても、作品の内在的意味を探求することは、特に自己と世界について問う『嵐が丘』については意義がある(105-6)。本論文は字義的気象という新しい切り口を起点としつつ、このような『嵐が丘』の内在的意味を明らかにする試みの一つである。まず作品で叙述される字義的気象と比喩的気象を確認し、次に字義的気象と比喩的気象が一体化した世界観を吟味し、最後に気象現象が起こる天空である「天国」の概念について考えたい。

1. 『嵐が丘』における気象の確認

『嵐が丘』で叙述・言及される気象は、字義的気象、比喩的気象、両者が合体した気象の3つに大別できる。まず1.では、字義的気象と比喩的気象を検討する。両者ともその役割は、現代の社会生活における気象とさほど変わりはない。それは、2.で扱う両者が合体した気象が『嵐が丘』独自のものであるのと対照的である。

1.1. 字義的気象

『嵐が丘』の物語が展開する18世紀後半から、ブロンテが本作品を執筆・出版した19世紀前半までの、イギリスにおける気象と社会の関係を簡単に確認したい。この頃、気象の持つ社会的影響力は大きく変わった。その変化とは、産業革命により、屋内労働を日常とするようになった人々にとって、日々の天気の影響が小さくなったことである。また都市部に流入した人々にとっても、天気の変化はさほど重要ではなかった。しかし産業化と都市化が相対的に天気の重要性を減じたとはいえ、農業従事者にとっては、天候は引き続き重要であった。1850年にイギリス気象協会 (the British Meteorological Society) が設立され、続いて1855年に商務省 (the Board of Trade) の気象部が設置され、国による気象の観測・予報が始まった (Matthew 23)。舞台が農場や農地のある田舎に設定されていること、作者が都会ではなく田舎に住み、また天気予報のない時代に生きたことを考え合わせると、『嵐が丘』における気象は、登場人物に対して産業革命以前と同じような影響力を持つものであるといえよう。

『嵐が丘』の字義的気象、すなわちテキストにおける実際の天気を持つ機能は、主に4つある。

1.1.1. 話題

気象は、会話の特に導入部における無難な話題である。冒頭でロックウッドが2度目に嵐が丘を訪問した際、2代目キャサリンに「荒れた天気ですね」（“Rough weather!”, I-20, 7）と語りかける。返事がないことで、この世帯の異常が示される。これ以降、天気が無難な話題となることはほとんどない。これは、限られた数の登場人物たちが、家族的関係にあり社交のために天気の話をする必要がないか、敵対関係にあり友好的なコミュニケーションを取る意志を欠くことを示す。

1.1.2. プロット展開

気象はプロットの展開においても影響力を持つ。特定の天気が直接的に関与する場合と、間接的に関与する場合がある。さらに登場人物が天気と無関係に行動する場合もある。また、同じ天気のもと、これらのうちいくつかを組み合わさることもある。例えば、キャサリンの日記に描かれる日曜日は、一日中土砂降りであり、嵐が丘の住人たちは教会には行けなかったが、キャサリンとヒースクリフは乳搾りの女の外套を被って荒野に遊びに行っている。

まず気象がプロットに直接関与する例のうち、重要なものを確認しよう。言い換えれば、作者がプロット展開のために意図的に特定の気象を選択したと思われる場合である。ロックウッドは悪天候により嵐が丘に宿泊し、幽霊騒ぎを経て一家に興味を抱く。翌朝、雪の中を鶴の辻に帰り、体調を崩し、療養中の慰みにネリーからアーンショー家とリントン家の話を聴く。つまり作品冒頭の雪は、ネリーの語り的一大契機となる、すなわち『嵐が丘』の作品全体の成立に不可欠な気象である。気象はロックウッド以外の登場人物の発病も促す。ヒースクリフの失踪を知ったキャサリンは、雨に濡れたまま徹夜し病に倒れる。悪天候で足が濡れたネリーも、風邪で3週間寝込み、2代目キャサリンとリントン・ヒースクリフの接近を

許す。

気象が間接的にプロットに関与した例としては、エドガーの死病の進行が挙げられる。彼は、「寒くじめじめした」(“chill and damp”, II-8, 202) 秋の晩に風邪をひき、それが肺に居座り、全快を見ず死去する。ネリー曰く、リントン家は虚弱体質で、イザベラとエドガーは、徐々に進行し最後に急激に生命を消耗する不治の熱病で死んだに違いない(II-4, 169)。この熱病は、現在では結核と診断される可能性の高い、当時でいう「消耗性疾患」(consumption)を指すと思われる。エドガーは、イザベラの結婚まで続いた妹との同居中に第三者または彼女から感染したか、臨終に立ち会った3週間のうちに彼女から感染したのだろう。いずれにしても秋の悪天候は、彼が既に感染していた病気を進行させる要因になったといえる。

気象が間接的にプロットを展開させることには、行動を容易にしたり許可したりすることも含まれる。例えば、好天は行動を促す。ヒースクリフが死に際のキャサリンに会いに行く日曜日は、北国の3月にしては暖かい日で、ネリーは例外的に扉を開け放つ。ネリーは事前にヒースクリフからキャサリンとの面会を迫られていたため、好天を口実にしたとも解釈できる。好天とまでいえないがさほど悪くない天気も、登場人物の外出を可能にする。これは特に第2世代のキャサリンがリントン・ヒースクリフに会いに嵐が丘まで行ったり、二人が外で落ち合ったりする場合にあてはまる。寒さが未来の夫婦を近づけることもある。2代目キャサリンは、夫の死後、部屋に籠っていたが、寒さに耐えかね、火のある階下で、将来夫となるヘアトンたちと過ごすようになる。

1.1.3. 劇的効果

『嵐が丘』には、登場人物の感情やプロットのトーンと呼応すると思われる気象がある。言い換えれば、作者が小説内部の感情を強調し劇的効果を高めるために設定したと解釈できる例である。ただし細部を検討する

と、悲劇的な出来事が完全な悪天候の中に起きるわけではなく、判断は容易ではない。最も顕著な例が、ヒースクリフ失踪直後の嵐である。キャサリンが彼の不在に気づいてまもなく天気が崩れ、真夜中近くには雷鳴と稲妻を伴う嵐が「最大の怒り／猛烈な勢い」(“in full fury”, I- 9, 75) で嵐が丘屋敷を揺るがす。稲妻は神の復讐のしるしと解釈でき (Gezari 145), さらに“fury”という語の使用を擬人化と取れば、嵐に神や作者の意図を読み取ることができる。ただし嵐は20分という短時間で落ち着く。他にも、プロットに大きな影響力を持つ老アーンショーの死は、嵐は荒れているが、「寒くない」(“not cold”, I-5, 37) 10月の晩に起きる。また、キャサリンの葬儀の日には急激に天候が悪化するが、他方、死の直前の壮絶な数日間や死亡当日は好天である。

1.1.4. 物語る行為

気象には、過去の出来事の想起を補助する機能もある。天気は我々が出来事を記憶する際大きな役割を果たしうる (Chesney 15)。さらに、重要な出来事が起きた時の天候は記憶しやすいだろう。『嵐が丘』で語られる期間は、30年近くにわたるため、出来事は当然、様々な季節や天候の中で起きる。語り手ネリーは、かなり細かに天候を記憶している。例えば、ある晴れた夏の日、老アーンショーはリヴァプールに行く。ヘアトンが誕生するのは、晴れた6月の朝である。失踪したヒースクリフが3年後再び現れるのは、9月の「気持ちのよい」(“mellow”, I-10, 81) 晩である。また天気は、特定の出来事に限らず、長期間の思い出も喚起する。ネリーは、晴れて霜の降った午後、嵐が丘の門を通りかかり、道標の石に黄色い太陽が照っているのを見て、夏を思い、20年前の子供時代にヒンドリーと遊んだ時の感覚を思い出す。

1.2. 比喩的気象

我々と同様に、『嵐が丘』の登場人物たちも、気象を比喩として使う。この比喩化は、ロックウッドやネリーによる語り、イザベラの手紙、登場人物たちの会話や独白において、性別、階級、気質の異なる人物によって行われる。登場人物たちは、特に季節の移り変わりや天気を意識しやすい環境にあるために、何かを理解したり考えを表現したりする際に、自然と気象を連想・利用するのであろう。気象の比喩は、語彙レベルのものに加え、より広義なものもある。語彙レベルの気象の比喩は、暗喩が大多数を占め、明喩は稀である。気象に関する比喩のうち、顕著なものを紹介する。

嵐 (storm, tempest) : 「嵐」は、外側の物語の語り手であるロックウッドが、冒頭の2度の嵐が丘訪問について使う。初の訪問では、外部者に警戒して興奮する犬たちの騒ぎを「すさまじい大嵐／大変な騒動」(“an absolute tempest”, I-1, 4) とか「嵐」(“the storm”, I-1, 5) と呼ぶ。翌日の訪問についても、キャサリン・リントンの夫であると誤解されたヘアトンの怒りを「嵐」(“the storm”, I-2, 10) に喩え、またヒースクリフが自分の許可なくロックウッドを箱型ベッドに案内したズイラを叱責する様子を「嵐のような場面」(“stormy scene”, I-3, 25) と形容する。内側の語り手ネリーも、主人一家に関して「嵐」の比喩を使う。帰還したヒースクリフと人妻キャサリンの関係を懸念し、「家庭の嵐」(“a domestic storm,” I-11, 98) を自分が起こしてでも妨害しなければならないと考えたり、キャサリンの錯乱状態を「情熱の嵐」(“a tempest of passion,” I-12, 115) とケネス医師に伝えたりする。2代目キャサリンが強制結婚のため嵐が丘に監禁された時、ネリーは鶴の辻の使用人を引き連れ、屋敷を「急襲」(“storm it,” II-14, 250) しようとする。

風 (lull, calm) : 「嵐」の反対語はどうか。「風」(lull) は、ネリーが、ヒースクリフと再会して歓喜するキャサリンを見て動揺するエドガーに関し、

「主人の不安は一時的に落ち着いた」(“My master’s uneasiness experienced a lull”, I-10, 89) と用いている。ちなみに「あやして寝かしつける」という動詞としては、2度使われている (I-4, 28; I-9, 67)。Cecilがその古典的な『嵐が丘』論で「嵐」(storm) と対比して使う「風」(calm) は、1か所で字義通り穏やかな天気を表し (II-17, 265)、10数か所で「感情の落ち着き」を表す。

雷 (thunder) : “Brontë”はギリシャ語で「雷」を意味するので (Davies, *Emily Brontë: Writers and Their Work* 40)、エミリーが他の気象用語に対するより自意識的に使った可能性もある「雷」は、「雷を落とす、怒鳴る」という意味の動詞で使われる。7回のうち、喩える側の人物は様々だが、喩えられる人物は全員男である。一番よく雷を落とすのはヒースクリフである。ロックウッドは、無断で箱型ベッドに泊まったことに彼が「雷を落とした」(“thundered Heathcliff”, I-3, 23) と書き、ネリーは、キャサリンの死を知らせに行った自分に対し「立ち去れと怒鳴って命じた」(“he thundered a command for me to go”, II-2, 148) と語る。イザベラはネリーに、ヒースクリフがヒンドリーに関して「怒鳴った」(“thundered Heathcliff”, II-3, 157) と話す。イザベラはネリーへの手紙において、そのヒンドリーも、ヒースクリフへの憎しみを「怒鳴った」(“thundered Earnshaw”, I-13, 124) と書いている。2代目キャサリンはネリーに対し、嵐が丘訪問中にヘアトンが自分に「恐ろしい呪いの言葉を怒鳴った」(“thundering one of his horrid curses”, II-10, 222) と報告する。その後二人が接近すると、ヒースクリフが、ヘアトンが彼女を追い出さないなら殴るぞと「怒鳴った」(“thundered Heathcliff”, II-19, 284) とネリーは語る。

雲 (cloud) : 「雲」の比喩は10回以上と多く、名詞と動詞の両方が、多様な登場人物に関して使われる (うち“thunder-cloud”は2回, “beclouded”, “cloudy”, “cloudless”は各1回)。ちなみにこの語は、字義通りの意味でも、

ほぼ同数回使われている。イザベラがネリーに語るに、キャサリンの死後、ヒースクリフの額には「厚い雲」(“a heavy cloud”, II-3, 158)がかかっていた。ネリーも、若い人たちの表情が曇るのを見逃さない。2代目キャサリンに使用人と誤解されたヘアトンは、「雷雲のように黒く」(“black as a thundercloud,” II-4, 172)なる。ヒースクリフから、リントン・ヒースクリフが死にかけていると聞いた「キャサリンの心は曇った」(“Catherine’s heart was clouded,” II-8, 206)。キャサリンがヘアトンに読み方を教え始めると、彼は「急速に無知と墮落の雲を振り落とした」(“shook off rapidly the clouds of ignorance and degradation”, II-19, 286)。

雨 (rain) : 雲の後に「雨」が続くこともある。イザベラがネリーに続けて語るに、ヒースクリフのせいでキャサリンの死が早まったと彼女が示唆すると、「彼の目から涙が降った」(“his eyes rained down tears”, II-3, 160)。しかし雨は、字義通りの意味で使われることが圧倒的に多く、比喩的な使用はこの1回限りである。

雪 (snow) : 「雪」の比喩は2か所あり、どちらも珍しく明喩である。ネリーは錯乱して枕の中の羽毛を取り出しては確かめるキャサリンに対し、「なんて散らかりよう！ 羽毛が雪みたいに舞っている」(“There’s a mess! The down is flying about like snow”, I-7, 108)とたしなめる。キャサリンが出産後間もなく死去すると、エドガーは妻の死を悲しみ赤子をあまり顧みなかったが、「その冷たさは4月の雪のようにすぐにとけた」(“that coldness melted as fast as snow in April”, II-3, 162)とネリーはいう。

太陽 (sunshine) : 「太陽」が出ることもある。ネリーは、母キャサリンに関しては一時的な上機嫌、娘キャサリンに関しては、加えてより恒常的な喜びとしても用いる。エドガーと結婚したキャサリンは、定期的に憂鬱で寡黙になるが、「晴れ間が戻ると夫も明るく応え歓迎した」(“The return of sunshine was welcomed by answering sunshine from him”, I-10, 81)。ヒースク

リフの帰還後、イザベラと共に嵐が丘を訪問することをエドガーが許可すると、キャサリンは「夏のようなやさしさと愛情」(“a summer of sweetness and affection”, I-10, 88) で夫に報い、屋敷の主人も使用人も「永遠の太陽」(“the perpetual sunshine”, I-10, 88) の恩恵を受ける。母の死と引き換えに誕生した娘は、「寂しい家に太陽の光をもたらした最強の存在」(“the most winning thing that ever brought sunshine into a desolate house”, II-4, 167) となる。さらにネリーは、太陽の比喩を使って、実際の天気と2代目キャサリンの表情に相似を見出す。好天の8月の午後、父の体調を憂いながらも、リントン・ヒースクリフに会いに行くキャサリンの顔は、風景と同様に「影と太陽に素早く交互に覆われ、しかし影がより長く居座り、太陽はより移ろいやすかった」(“shadows and sunshine flitting over it, in rapid succession; but the shadows rested longer and the sunshine was more transient”, II-13, 234)。

天気 (weather) : 今挙げた諸気象の上位概念である「天気」も、動詞として用いられる。ネリーは、ヒースクリフ失踪後のキャサリンが、1回目の病気を「何とか切り抜けた」(“she weathered it through”, I-9, 78) と表現する。

ちなみに「風」(wind) は、『嵐が丘』において重要な現象・概念だが、名詞と動詞のいずれも比喩として使われることはない。ただし関連物である「風見鶏」(weather-cock, vane) は、ロックウッドが自分自身に対して、またネリーが死ぬ直前のキャサリンに対して使っている。ロックウッドはある女性に恋心を抱いた結果、人付き合いに嫌気がさし、人里離れた鶴の辻に滞在しにこの地に来たが、2回目の嵐が丘訪問後に気が変わり、ネリーを呼んで話をさせる。その気まぐれを「私たちはなんとむなしい風見鶏であることか！」(“What vain weather-cocks we are!”; I-4, 28) と一般化する。ヒースクリフとキャサリンの最後の対面を見守るネリーは、キャサリンの表情が突然曇るのを見て「彼女の気分は常に変化する気まぐれに反応す

る風見鶏に過ぎなかった」(“her humour was a mere vane for constantly varying caprices”, II-1, 139) と表現する。

以上『嵐が丘』における気象の比喩を確認した。特定の気象の字義的要素と比喩的要素の両方に関連する人物として、最も顕著なのが雷とヒースクリフである。彼が失踪すると雷が轟き、彼自身が雷のごとく怒鳴る。またキャサリンは、この後詳述するように、風を求めると同時に、風と連想される存在である。

2. 世界観化した気象

これまで見た気象の持つ諸側面は、基本的に、我々の実生活においても馴染みのあるものである。次に『嵐が丘』が独自に発展させ提示する気象、すなわち字義的か比喩的か問うことが不可能・不必要であるような、両者が一体となり世界観化した気象について検討したい。

2.1. 世界の理解に応用される自然現象

字義的気象と比喩的気象が合体したものの象徴が、「風吹き荒れる高台」(wuthering heights) と名付けられた嵐が丘屋敷とその周辺である。ここでは字義的には実際に強風が吹き、比喩的にも登場人物が激烈な生を繰り広げている。この“wuthering”という形容詞が方言であることが示唆するように、嵐が丘は特定の場所に唯一存在する空間である。この空間形成に大いに貢献しているのが気象である。そもそも天気によって「ヒースの荒野」(moorland) が存在するからである (Chesney 21)。嵐が丘とは、気象、地形、風景、人々の暮らしが一体となり、人物の性格や植物の外形などを形成する生のある場である。

このような嵐が丘屋敷に暮らす登場人物たちは、多くの経験や現象を、実在と抽象が合体した形で認知する。例えば、ヒースクリフは孤児となっ

たヘアトンに対し、「一本の木が同じ風にあたって、他の木と同じように捻じ曲がるかどうか見てやろう！」（“we'll see if one tree won't grow as crooked as another, with the same wind to twist it!”，II-3, 165）と表現する。ネリーも、ヒースクリフとエドガーの違いを、「美しく肥沃な谷間」（“a beautiful fertile valley”，I-8, 61）と「荒涼とした石炭の採れる丘陵地方」（“a bleak hilly, coal country”，I-8, 61）に喩える。Gezariはこの喩えに関し、二人の男の相違は本質的なものであるので、ネリーは自然の要素、天気、景色、動物等の類似に頼らざるを得ないとしている（127）。逆にいえば、対照的な人物を的確に表現しうるほど、自然は多様性に富んでいる。

嵐が丘によって最も強く人格形成上の影響を受け、字義的気象と比喩的気象の一体化した世界観を発展させた人物が、キャサリン・アーンショーである。Gezariによると、エミリー・ブロンテは同じ「生命力」（life force）が人間、動物、自然に流れると考えていた（127）。人類を含めた生物とそれが生きる環境に、序列を持ち込まず共通の生を見出す態度は、キャサリンにも見て取れる。その好例が、自分のエドガーへの愛とヒースクリフへの愛を、それぞれ「月光と稲妻、霜と火」（“a moonbeam from lightning, or frost from fire”，I-9, 71）に喩えることである。またヒースクリフに恋するイザベラに対し、彼は「ハリエニシダと玄武岩の不毛の荒野」（“an arid wilderness of furze and whinstone”，I-10, 90）であり、彼に心を差し出すことを勧めるのは「あの小さなカナリアを冬の日にパークに出すのと同じ」（“I'd as soon put that little canary into the park on a winter's day”，I-10, 90）と諭すことから、自然現象に真理と教訓を見出し、日常生活で応用していることがわかる。

2.2. キャサリンと嵐が丘の一体化

このような自然現象との類似を手掛かりに世界を理解する傾向は、先

に見た気象の比喩化と同様に、登場人物が環境と深く関わり生活することによって形成されたものであろう。キャサリンは嵐が丘の環境と密接であるがゆえに、その気象は彼女の生命にも影響する。ヒースクリフ失踪後、雨に濡れ病に倒れ、全快を見ず結婚し、2回目の発病で「脳炎」(brain fever)と診断され命を落とす。対照的に自然現象に左右されないのがヒースクリフで、鶴の辻を覗きに行った後雨の中を帰ってきても、キャサリンの死後雪の中で過ごしても、体調を崩さない。

それではなぜ、そもそもキャサリンはこれほどまでに嵐が丘と密接なのだろうか。キャサリンと嵐が丘の一体化には、社会的要因がある。屋敷に刻まれた1500年という年号が示す通り、アーンショー家は少なくとも3世紀は続く旧家であるが、首都ロンドンやその他の地方に屋敷を所有したり、家族で大陸旅行したりするほどには裕福でない。したがって一家の娘であるキャサリンの居場所は、必然的に嵐が丘周辺に限られる。男たちはこの限りではなく、外に出て異質なものに会い、それらを持ち帰ることができる。実際、老アーンショーはリヴァプールからヒースクリフを連れ帰り、ヒンドリーは大学に進学し妻フランシスを伴い帰郷する。行動範囲を制限されたキャサリンが、ヒースクリフと共に鶴の辻屋敷を覗きに行ったのは、彼女にとって初めての地理的越境行為であった。この時点まで彼女の行動圏は、礼拝に行く近隣の教会などを除けば、人里離れた荒野に立ち気象を直に感じられる嵐が丘に基本的に限定されていた。

しかしキャサリンと嵐が丘の関係で特異であるのは、彼女が6歳の頃に外からやってきたヒースクリフが、いつしか自分と共に嵐が丘に帰属する存在となったことである。絶食し錯乱状態を経たキャサリンは、自らの苦しみにについてこう説明する。

“[...] But supposing at twelve years old I had been wrenched from the

Heights, and every early association, and my all in all, as Heathcliff was at that time, and been converted at a stroke into Mrs. Linton, the lady of Thrushcross Grange, and the wife of a stranger; an exile, and outcast, thenceforth, from what had been my world —— You may fancy a glimpse of the abyss where I groveled! [...]” (Brontë I-12, 111 下線部筆者)

注意すべきは、物理的に嵐が丘を離れたのが結婚した18歳の時であるにもかかわらず、12歳で兄ヒンドリーによりヒースクリフから引き離されたことを、彼女自身が「嵐が丘から引き離された」と認識していることである。ここから、少なくとも12歳までには、嵐が丘とヒースクリフが分かち難く結びつき、故郷・実家・心の拠り所としてのホームを形成していたことがわかる。廣野の指摘通り、ロックウッドの見た亡霊が子供の姿をしているのも、彼女の霊が不幸の原点である12歳の時に留まっているからであろう(117-18)。この後、キャサリンはネリーを振り切って窓を開け、ネリーには見えない嵐が丘の光を見、その場にはいないヒースクリフに語りかける。

“Look!” she cried eagerly, “that’s my room, with the candle in it, and the trees swaying before it . . . and the other candle is in Joseph’s garret . . . Joseph sits up late, doesn’t he? He’s waiting till I come home that he may lock the gate . . . Well, he’ll wait a while yet. It’s a rough journey, and a sad heart to travel it; and we must pass by Gimmerton Kirk, to go that journey! [...]” (Brontë I-12, 111 下線部筆者)

「私たち」(we) という人称が示す通り、キャサリンはヒースクリフのもとに帰るのではなく、ヒースクリフと共に嵐が丘に戻らなければならない。

後述するように、嵐が丘は彼女が受容的になれる場所であるため、このホームは自室のみならず、風に揺れる木々や、自分の悪口を老アーンショーに吹き込んでいたジョウゼフをも不可欠な構成要素として含んでいる。

キャサリンと嵐が丘の独特な一体化は、そもそも嵐が丘にヒースクリフがいたことで実現したものといえる。人間としての相性の良さに加え、ヒースクリフの社会的属性が、二人の親和力を強化した。まず外部から来たヒースクリフを通して、キャサリンは家に居ながらにして外界と接触できた。また、嵐が丘に来る前の自分の過去について話さないヒースクリフは、素性が不明で家族を持たない空白的存在として、キャサリンのホームに統合しやすかった。さらに、老アーンショーから息子同然に扱われるヒースクリフが自分に服従することで、家父長的文化において本来は持ち得ないような権力を有することができた (Gilbert and Gubar 264-65)。ヒースクリフを得たことで、彼女は実家という最も近く小さな社会で充足し、嵐が丘を自分にとっての世界最高の場所、すなわち後述する「天国」とすることができたのである。

2.3. キャサリンと風

嵐が丘の気象のうち、キャサリンと最も親近性のある現象は風である。Chesney は『嵐が丘』、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』、アン・ブロンテの『ワイルドフェル館の住人』で言及される天気を調査した。その結果、『嵐が丘』において最も言及が多かったのは「風」(wind)で20%、次が「太陽」(sun/sunshine)で14.8%であった(21)。ちなみに『ジェイン・エア』は雨で、『ワイルドフェル館の住人』は太陽である。結末で嵐が丘を再訪したロックウッドが、この地帯の夏と冬の落差に一驚するように、風といっても、季節や天候によって性質が大きく異なる。風の多様性は、風と親近性のあるキャサリンの多面性と通じ、ネリーをして彼女を

風見鶏に喩えさせるのである。

嵐が丘に吹く風に対するキャサリンの反応は、その人生の危機を明らかにする。1回目の発病時は、雨に濡れたまま夜を明かし、体が凍え、窓を閉めるようネリーに要求する。親近性のある風を拒否することで、彼女がアイデンティティの危機にあることがわかる。2回目の発病時は、心身が虚弱な状態で、北東、すなわち嵐が丘方面から吹く真冬の風に「一息だけでもあたらせて」(“do let me have one breath!”, I-12, 110)と言って風を欲する。風を「息」(breath)と表現することが示唆するように、生命の息吹である風を求めることは、キャサリンの生きる意志を表す。しかし今いる場所が鶴の辻で、既に死病に蝕まれた身体では、故郷の風は既に有害なものに変容している。

「息」として捉えられる風は、さらにキャサリンの死後、ヒースクリフにとって彼女の存在を連想させ証明する現象となる。キャサリンの葬儀の後、墓を掘った彼は、棺を開けようとした瞬間に上方にため息を聞き、「その温かい息がみぞれ混じりの風にとって代わるのを感じた気がした」(“I appeared to feel the warm breath of it displacing the sleet-laden wind”, II-15, 256)。キャサリンの存在を確信した彼は、この後地上に彼女の存在を求め始める。

2.4. キャサリンとエミリー・ブロンテの受容的態度

嵐が丘の気象はキャサリンの人格形成に影響した。Gezariは、『嵐が丘』において、自然は比喩ではなく、天候にも意図がないと指摘する(23-24)。先に見たように作者や神の意図を読み込むことが可能な天気もあるが、確かにキャサリンにとって気象とは、他者の意図によるものでも、己の心状の単なる投影でもない、個人の価値判断を超越した受容すべき自然現象である。彼女のこの受容的態度は、人物に対しても同様である。よってエ

ドガーとヒースクリフは、性質を異にする自然現象として、彼女の内面と並存する。彼女は自分のエドガーへの愛を季節により移り変わる「木の葉」(foliage)、ヒースクリフへの愛を不変の「岩」(rocks)に喩えるが、Stoneman が指摘する通り、2つは確かに異なるが必ずしも対立しない(527)。Davies も、稲妻と月光、火と霜、永遠の岩と木の葉といった対立物は、統一体を成す要素であり、人間は両方を要し欲すると考える(*Emily Brontë: Heretic* 86-87)。キャサリンが対照的な二人の人物を同時に求めることは、気象等の自然現象を受容することの一環なのである。

キャサリンは、同一の人物の変化や諸要素も受容する。ヒースクリフの場合、老アーンショーから息子同然の扱いを受けていた時も、その後ヒンドリーによって使用人に降格させられても、財力をつけて嵐が丘に帰ってきても、同じように受け入れる。兄ヒンドリーに関しても、彼が家長として支配的になっても、妻に先立たれて粗暴になっても、忌み嫌うことはなく、もしヒースクリフが危害を加えるなら、「自分が兄さんが身体的害を被るのを妨げる」("I stand between him and bodily harm", I-10, 88) といっている。自分と気質の異なるエドガーに対しても、ネリーから見て過剰にも思える愛情を見せ(I-10, 81)、自分に嫉妬するイザベラのことにも残酷なヒースクリフから守ろうとする。また、時に自分に敵対的にも見えるネリーにも寛容で、嫁ぎ先に連れて行く。動物に対しても愛情深く、自分を襲ったブルドッグのスカルカーにも、リントン一家に介抱される頃には、上機嫌で食べ物を与えている。

このキャサリンの受容的態度を促した最大の要因は、先述したように、嵐が丘が彼女にとって唯一の居場所であり、ヒースクリフによってさらに愛すべきホームとなったことである。同様の傾向は、自分の家を離れられない他の登場人物にも見られる。ヘアトンは自分を貶めるヒースクリフに懐き、2代目キャサリンはエドガー、ネリー、リントン・ヒースクリフ、

最後にはヘアトンと、関係性、性別、階級の異なる者をみな愛する。

自分のホームを愛し、ホームをいわば自分の存在の核として生きるキャサリンの姿勢は、作者エミリー・ブロンテにも共通する。先に触れた、人間と動物と自然と同じ生命力が流れているという考え (Gezari 127) は、これらと接触することで形成されたものである。エミリーはあらゆる天候の中、ハワース近辺を散歩した (Gezari 10)。彼女の書いた日付入りの詩は、その時のハワースの天候を反映しているという (Lutz 66)。確かに、詩で叙述される季節には夏も冬もあり、エミリーが天気と無関係に、散歩と詩作を行ったことがうかがえる。このエミリーの受容的態度は、鶉の辻で嵐が丘を想うキャサリンの場合と同様に、我が家に関連する場合に限られた。よって家を離れての就職や留学は苦痛でしかなく、短期間に終わった。

『嵐が丘』にその明確な影響を確認することは難しいが、エミリーは6歳の時に一種の天変地異を体験している。1824年9月2日、牧師館から4マイルのクロウ・ヒル (Crow Hill) の荒野をアンや使用人と散歩中、沼地の決壊 (bog-burst) に遭遇した。数日間続いた豪雨が、地滑りと洪水を起こしたのである。父パトリックは、これを終末論的に解釈し神の警告と受け取った (Barker 150-54)。Barker は、エミリーとアンも黙示録的解釈を持ち続けたと推測しつつ、この決壊への反応は、一篇の詩を除き見当たらないとしている (154)。エミリーが直に経験したこの劇的な自然現象に人間的な解釈を行った形跡がほとんどないことは、エミリーの自然に対する受容的・中立的態度を示しているとも考えられよう。そう解釈した場合、この点においても、作者エミリーとキャサリン・アーンショーは、似た世界観を共有しているといえる。

2.5. キャサリンの世界観の非共有性

キャサリンは、今見た独特の世界観が個人的なものであることを認識し

ていない。これが他者との不和や自身の苦しみを生む。エドガーに求婚された晩、ネリーに語る内容から、彼女が自分の考えを一般化していることがわかる。

“[...] I cannot express it; but surely you and every body have a notion that there is, or should be, an existence of yours beyond you. What were the use of my creation if I were entirely contained here? [...]” (Brontë 1-9, 72 下線部筆者)

彼女が独自の思想を普遍的であると信じるのは、気象という同じ場所にいる者全員が共有するものを、受容し内面化していることと関係があるろう。他者が自分とは異なる考えや感受性を持つことを知らないキャサリンは、嫉妬という感情も理解できず、ヒースクリフとエドガーを無理に握手させようとしたり、ヒースクリフに恋をしたイザベラを苛立たせたりする。

また、既に起こっている現象を受容する傾向は、外界の現実に積極的に働きかけない態度にも通じる。キャサリンは、ヒースクリフとの最後の逢瀬で、裏切りを責められ、彼が異なる考えを持つことを知り驚く。しかし誤解を解こうとはせず、現実のヒースクリフを諦め、これまで自分が理解し、自分の一部と化していたヒースクリフを愛し続けようとする。Millerも指摘する実在のヒースクリフと魂の奥に存在するヒースクリフの分裂は(194)、「これは私のヒースクリフじゃない。私は自分のヒースクリフをこれからも愛していく。そして一緒に連れて行くの。彼は私の魂の中に入る」(“That is not *my* Heathcliff. I shall love mine yet; and take him with me — he’s in my soul”, II-1, 141) という言葉に明らかである。目の前に現存する“you”としてのヒースクリフではなく、彼女の心の中にしか存在しない“he”としてのヒースクリフを連れて行く先とは、死後の世界である。現実を変える

気力もなく、さりとて現実のヒースクリフという外界の現象を受容もできない時、彼女はそれまでの自分を失い、死ななければならない。そして実在のヒースクリフは、この世に残されることになる。

3. 天 国 観

これまでの議論を踏まえ「天国」(heaven)について考えたい。天国は、キリスト教神学における基本的な概念であると同時に、雨、雪、雷などが降下してくる天空でもあるため、登場人物が気象との関連で発展させる宗教観、またはその欠如を明らかにするからである。Winnifrithが、『嵐が丘』における作者の考えを知る唯一の満足のゆく手掛かりとなるのが、天国と地獄への言及の分析であるとするように(67)、天国観の考察は、特にエミリーと価値観を共有するキャサリンの思想解明に役立つ。

3.1. ののしり言葉

まず「天国」は、驚き、不信、感嘆など、話者の感情を強調するののしり言葉として使われる。ヒースクリフが帰還しリントン家に混乱が生じた際に、キャサリンが「願わくば」(“please Heaven!”, I-10, 94), 「ああ、何てこと！」(“Oh! Heavens!”, I-11, 102) と叫ぶ。イザベラとネリーがそれぞれ「お願いだから」(“For heaven’s sake”, I-13, 126; “For Heaven’s sake”, II-1, 143) 急ぐよう訴え、リントン・ヒースクリフも「お願いだから」(“For Heaven’s sake”, II-13, 235) 怒らないようにキャサリン・リントンに頼む。これらの話者が、女や、病弱で父親に支配された男子であるのは、人に依頼する依存的存在であることの証として解釈できる。対照的なのが、支配的人物であるヒースクリフである。例えば上に挙げたキャサリンの言葉の2例目は、彼女が台所でヒースクリフとエドガーに対して怒りを表す際の発言だが、彼女が「天国」という語彙を用いて嘆くしかないのに対し、エドガー

に殴られたヒースクリフは、反対概念である「地獄」(hell)を使い、このまま引き下がるのは「絶対に嫌だ」(“By Hell, no”, I-11, 103)と強く否定する。

3.2. キリスト教の教義における天国

キリスト教的な神や天使が居る場所、死後に家族と再会する場所としての天国という概念も、多くの登場人物により認識されている。Arièsは、19世紀に死は他者、特に家族の死を悼むロマン主義的な「美しい死」になったとし、イギリスの典型例としてブロンテ姉妹とその作品を考察し、死期迫るエドガーが、天国でじきに亡妻に、さらにはいずれ娘とも再会することを確信していることなどを指摘している(436)。この家族と死後天国で再会するというヴィクトリア朝の人々の信念を、Jallandは福音主義の影響によるとしている(12)。『嵐が丘』においては、ネリーは正統派の英国国教会、ジョウゼフはカルヴァン派の天国観を持つとよく指摘される(Gezari 67; Winnifrieth 70)。Gezariは、ネリーの描写するエドガーの死を、死を恐れず救済を信じるという点で、善きキリスト教徒の死の典型としている(370)。ネリーは、周囲を混乱させ自らも苦しみながら死んだキャサリンについては、その安らかな死に顔を前に、「天国の天使も、彼女の姿以上に美しくはないでしょう(略)まだ地上にいるか、もう天国なのかはともかく、その魂は神の国にあるのです」(“no angel in heaven could be more beautiful than she appeared [...] Whether still on earth or now in Heaven, her spirit is at home with God!”; II-2, 145)と考えている。ヒースクリフに彼女の死を知らせに行った時も、「そうです。死にました。(略)きっと天国に行ったのでしょう。私たちが然るべき警告を受け止め、悪の道を避け善を追求するなら、皆そこで一緒になれるでしょう」(“Yes, she’s dead! [...] Gone to heaven, I hope, where we may, everyone, join her, if we take due warning, and leave our evil

ways to follow good!", II-2, 147) と死後の再会について述べている。キャサリンが天国に行ったといわれたヒースクリフは、「あいつはどこにいるんだ。あそこじゃない、天国ではない。消えてもいない。どこなんだ」("Where is she? Not *there* — not in heaven — not perished — where?", II-2, 147) と絶叫し、正統派の信仰の欠如を露わにする。

3.3. 登場人物たちの異なる天国観

「天国」は、死後の世界に限らず、「理想の場所や状態」の意味でも使われる。この個人的な定義による天国は、軽い比喩として使う場合から、精神的な生死に関わる場合まで、深刻さの度合いが異なる。ロックウッドは冒頭で、自分が滞在する人里離れた土地を「人間嫌いにとって完璧な天国」("A perfect misanthropist's Heaven", I-1, 1) と呼ぶ。2代目キャサリンとリントン・ヒースクリフは、暑い7月の最も楽しい過ごし方について、それぞれ天国の比喩を使って主張し合う。人物によって天国の概念が異なることが明確になる場面である (Winnifrith 68)。

キャサリン・アーンショーにとっての天国は、嵐が丘である。彼女にとってその天国は、上の例よりはるかに深刻で、アイデンティティの形成と維持に関わる、実体と抽象的観念を併せ持つ場所である。彼女は夢で天国に行ったが、自分のホームには思えず、天使たちに嵐が丘に突き落とされて嬉し泣きする。キャサリンは、一般的には天国は幸福な場所であることを認識しつつ、嵐が丘を選択した。同様に、エドガーのような条件の人物との結婚が一般的には喜ばしいことであるが、自分にとっては最上の喜びを与えるものではないことを自覚している。

キャサリンは嵐が丘の上空から降下する様々な気象を受け入れ、そこには天使に突き落とされる自分さえ含まれるわけであるが、上空からの降下物を受容する態度は、天を仰ぐ宗教的敬虔とは異なる。ヒースクリフと共

に嵐が丘にいる限り、彼女は強い生を持ち、到来するものを受容できる。つまり、キャサリンが欲するのは死後の幸福ではなく、嵐が丘での生である。

“[...] If all else perished, and *he* remained, I should still continue to be; and if all else remained, and he were annihilated, the Universe would turn to a mighty stranger. I should not seem a part of it. My love for Linton is like the foliage in the woods. Time will change it, I'm well aware, as winter changes the trees — my love for Heathcliff resembles the eternal rocks beneath — a source of little visible delight, but necessary. Nelly, I *am* Heathcliff — he's always, always in my mind — not as a pleasure, any more than I am always a pleasure to myself — but as my own being [...]” (Brontë I-9, 73)

12歳の頃にヒースクリフと引き離されたことで、キャサリンは天国にいる状態を既に喪失している。しかし「他のすべてが滅びても、彼さえいれば自分も生き続けられる」とあるように、エドガーと婚約したこの頃には、ヒースクリフが嵐が丘を代替しうるホームとなっている。よって彼の居ない上空ではなく、自分の存在が立脚する「足下の永遠の岩」たるヒースクリフへの愛がある地上こそが、彼女の天国である。しかし彼女は、ヒースクリフの存在によって成立する天国において別の男と結婚することの社会的困難を察知し、自分の思想を言語化し、自分と他者に向かって肯定する必要がある。Millerの指摘通り、“A is B”という構文はAとBの分離を前提とするので、キャサリンは「自分はヒースクリフである」と発言することで、二人の同一状態の喪失を認めている(176)。また岩上が“*I am Heathcliff*”という文に関して解説するように、be動詞の強調は、否定

が起きやすい状況における「AがBである」という肯定の強調である（89-91）。さらに奥村が主張するように、キャサリンとヒースクリフの関係は本質的に言葉で語り得ない性質を持ち、キャサリン自身がそれをうまく表現できない（41, 43）。つまりキャサリンの「私はヒースクリフだ」という主張は、社会的要請に迫られた言語化の試みに過ぎず、ヒースクリフとの関係を正確に言い当てているかも不明であり、逆説的に「私はヒースクリフではないのではないか」という不安な認識を露わにするものである。

ヒースクリフにとっての天国とは、特定の場所とは関係なく、キャサリンと共にあることである。よってキャサリンとは対照的に、嵐が丘への愛着は薄い。彼にとっての嵐が丘とは、偶然リヴァプールから移り住み、キャサリンが他家に嫁ぐことが決まると離れる場所である。3年後に再び嵐が丘に住むのは、思い出の場所に住みたいという感傷的な理由ではなく、鵜の辻に住むキャサリンに会うのに便利であるという実際的な理由によるだろう。ヒースクリフはまた、嵐が丘屋敷のみならず、周辺の環境にも関心が薄い。キャサリンの死を知らせに来たネリーが目撃するトネリコの木と一体化した姿や、風にキャサリンの存在を感じ取る能力などから、一見ヒースクリフは自然に近い存在のように見えるが、実際は鵜の辻から締め出されたり、キャサリンを追い求めたりして戸外にいるに過ぎない。ヒースクリフにとっては、キャサリンの存在だけが重要なのである。この過剰な執着は、キャサリンが嵐が丘と彼を通してそこに展開する気象や人間関係を受け入れたように、ヒースクリフが彼女を通じて世界を受容してきたことに起因する。外部から嵐が丘にやって来た彼は、特に老アーンショーの死後、唯一の味方となった彼女を通して、この世での居場所を確保し、出来事と関わってきた。しかし、キャサリンがヒースクリフを嵐が丘と共に自分の一部にしたのとは異なり、ヒースクリフは彼女を、受容し取り込むのではなく、常に外にいて自分と共にある他者として求めてき

た。つまり彼は、嵐が丘におけるヒースクリフとの生を理想とするキャサリンとは、異なる天国観を持つのである。鵜飼は、互いに強く惹かれあいながらも、二人の結婚や性愛に関する価値観や行動が違っていることを『嵐が丘』の悲劇の要因としているが（岩上・惣谷215-16, 224-28）、二人の似て非なる天国観も、同様の悲劇の一因といえよう。

ヒースクリフは、鵜飼の辻屋敷を覗きに行き引き裂かれるまで、基本的にキャサリンと共にあり、自分の天国にいた。だからこそ、両親の留守中に豪華な屋敷を独占しつつ喧嘩するリントン兄妹を見て、「俺たちなら天国にいると思っただろう」（“We should have thought ourselves in heaven!”, I-6, 42）と思う。ヒースクリフは、この後キャサリンとリントン家との交流が深まるにつれ段階的に天国から遠ざかり、同時に彼女が不在の場所、すなわち天国の反対概念である「地獄」（hell）に近づいてゆく。そしてキャサリンの死後は、「自分の未来は二語で言い表せる。死と地獄だ——彼女を失った後に生きることは地獄だ」（“Two words would comprehend my future, *death* and *hell* — existence, after losing her, would be hell”, I-14, 131）と自ら予言していた現実を生きることになる。

ここでヒースクリフの天国観とキリスト教的天国の関係について整理したい。ネリー、ジョウゼフ、エドガー、第2世代のキャサリンがそれぞれの信仰に即した言動を所々で見せるため『嵐が丘』にはもともとキリスト教色がそれなりに強く、そのような作品において、キリスト教とも一定の関係を持つヒースクリフの態度にキリスト教的なものを読み込むことは、可能であり容易でもある。Thormählen は、キャサリンは彼の唯一の神的存在 (deity) であり、その彼女と共にあることが彼の天国であるとする (104)。鵜飼は、二人の子供時代の幸福とその後の苦悩は、キリスト教が想定する天国の幸福および地獄の苦悩と、その深さにおいては似通っているとする (鵜飼 4-5)⁴⁾。確かに、特定の一人を希求しその不在に苦しむ姿

は、敬虔な一神教の信徒の受難に通じる。また、墓場でキャサリンのため息を聞くという出来事も、聖霊体験を思わせるかもしれない。しかしヒースクリフの持つ「信仰」とは、子供の頃からジョウゼフや教会での礼拝を通してある程度馴染んでいるキリスト教的天国や地獄の概念の枠組みを借りる形で発展させ、最後にはキリスト教の教義から大きく逸脱するに至った独自のものと理解すべきである。キャサリンの天国観も、内容はヒースクリフのそれと違っているが、キリスト教の概念から出発して、極めて個人的な概念にまで発展させたという点は同様である。実際、先に紹介したキャサリン喪失後に生きるのは地獄だという台詞が明らかにするように、彼はキリスト教徒として死後天国でキャサリンに再会するという希望を持っていない。そもそもキャサリンが天国にいないと確信するからこそ、地上での再会を求めるのである（廣野 95）。彼が信じるのは、キリスト教徒としての死後の至福ではなく、キャサリンのため息という地上の感覚的経験である。またヒースクリフにとってのキャサリンは、神的人格とはいえない。特に再会後の態度に明らかであるが、彼には、彼女の心に叶わぬことへの恐れも、彼女の愛を信じようとする気持ちも欠如している。そして何より、彼の求める対象がキャサリンであるという点において、彼の思想はキリスト教的とはいえない。したがって彼の天国観も、極めて独自性の強いものであるといわざるを得ない。

結局のところ、ヒースクリフは死後キャサリンと再会し、彼なりの天国へ行ったのだろうか。彼自身は死の直前に再会の予感を強め、「天国」に近づいていることをほめかしている。ネリーに対し、何かを目で追いながら「昨日の夜は地獄の入り口にいた。今日は俺の天国が見えるところにいる」（“Last night, I was on the threshold of hell. To-day, I am within sight of my heaven”, II-20, 292）と話す。また、ネリーに身勝手な生き方を指摘され「死ぬ前に変わらないと、天国に行く資格がないのではないか」（“how unfit you

will be for its heaven, unless a change takes place before you die? ”, II-20, 297) といわれると、「自分の天国にはあと一步だ」(“I have nearly attained *my* heaven”, II-20, 297) と応じたりする。屋内にいる時は、キャサリンが入ってこられるよう、悪天候でも窓を開けている。そしてついに激しい雨が一晚降った翌朝、ネリーはヒースクリフの部屋の窓が風で揺れているのに気づき、雨が降り込む部屋の中で彼が死んでいるのを見つける。キャサリンが風だとして、その彼女が迎えに来たのだろうか。ヒースクリフが2度目にキャサリンの墓に行き棺を開けた時、彼はその顔が原形をとどめていると思った。しかし墓堀人が風で変化すると言ったため、すぐに蓋を閉じさせた。本当にキャサリンが風ならば、その風が彼女の物理的側面を損なうことを阻止しなければならないという矛盾は、ヒースクリフが近づきつつあるという天国が、独我論的次元にあることを示唆する。

結：気象をめぐる2つの解決

ネリーの話すべてを聞き終わったロックウッドは、「穏やかな空」(“benign sky”, II-20, 300) の下、「そよ風が息をする」(“the soft wind breathing”, II-20, 300) のに耳を澄まし、死者たちの安眠を確信する。嵐が丘の風には、キャサリンの身体を危険にさらす有害なものもあった。しかし最後に、人間に快を与え、「息」という語が示すように生に満ちた風が吹いて、ロックウッドにとっての嵐が丘の物語は終わる。しかし Gose が指摘するように、空が穏やかではなく、例えば「風の立つ」(wuthering) 状態であったなら、気象と呼応して死者が安らかに眠っているという論理は破綻する(71)。その場合この平和な結末は、ロックウッドの短絡的な性格と穏やかな天気を実現する恣意的な物語的解決に過ぎない。他方、この直前の箇所注目すれば、また違う解釈が可能となる。彼は自分が留守にした7か月の間に、古い教会がさらに老朽化したのを見て、秋の嵐の度に徐々に崩壊

するところを想像する。重要なのは、このように長期的な気象の破壊的影響を、彼が嘆くのではなく、自然なこととして受容していることである。この態度に注目すれば、ようやく秩序が回復した世界において、長期的気象の影響もまた、自然の秩序の一環であるという認識に彼が到達したことを提示する結末と考えられる。過去の夥しい数の議論の多くと同様に、本論文も『嵐が丘』の結末についての唯一絶対の解釈はないことを認めて終わりたい。ただ一つ確かなのは、どちらの説を取るにせよ、題に気象を冠した『嵐が丘』という物語は、気象によって開始し、その力を指示して閉じるということである。

註

- 1) 本論文は、2016年10月15日に県立広島大学広島キャンパスで開催された日本プロンテ協会2016年大会で発表した「気象から見る『嵐が丘』」に加筆修正したものである。関係者の皆様に感謝申し上げる。
- 2) この絵本は、9つの天気を取り上げ、『嵐が丘』の原文から該当する部分を引用し、対応するイラストをつけたものである。9つの天気とは、“breezy”, “sunny”, “cloudy”, “windy”, “stormy”, “rainy”, “misty”, “snowy”, “still”である。
- 3) 『嵐が丘』の従来への批評については川口と廣野から大いに情報を得た。『嵐が丘』の複雑な時間構成については廣野作成の年代記から大いに情報を得た(318-36)。
- 4) 鶴飼信光氏から2015年日本プロンテ協会関西支部大会における講演「『嵐が丘』とキリスト教—その近さと隔たり」の発表原稿を特別にお借りした。謝意を表したい。

参考文献

- 岩上はる子「『嵐が丘』第9章を英文解釈する—*I am Heathcliff*を中心に」『プロンテ・スタディーズ』第5巻第3号、2011年、85-96頁。
- 岩上はる子・惣谷美智子編著『プロンテ姉妹と15人の男たちの肖像—作家をめぐる人間ドラマ』ミネルヴァ書房、2015年。

- 鶴飼信光「『嵐が丘』とキリスト教—その近さと隔たり」[2015年日本ブロンテ協会関西支部大会における講演の発表原稿]。
- . 「ヒースクリフ 『嵐が丘』 — その「男」を考える —」[岩上・惣谷 第11章]。
- 海老根宏「『嵐が丘』と超越の問題」『英国小説研究』第23冊, 英潮社フェニックス, 2008年。
- 奥村真紀「『嵐が丘』における語りと沈黙」『ブロンテ・スタディーズ』第6巻第1号, 2015年, 31-45頁。
- 川口喬一「『嵐が丘』を読む ポストコロニアル批評から「鬼丸物語」まで」みすず書房, 2007年。
- 廣野由美子『謎解き「嵐が丘」』松籟社, 2015年。
- Adams, Jennifer. Art by Alison Oliver. *Wuthering Heights: A BabyLit Weather Primer*. Gibbs Smith, 2013.
- Ariès, Philippe. *The Hour of our Death*. Trans. Helen Weaver. Penguin, 1983. (フリップ・アリエス『死を前にした人間』成瀬駒男訳, みすず書房, 1990年)
- Barker, Juliet. *The Brontës*. Pegasus, 2012 [2010].
- Barry, Peter. *Beginning Theory: An Introduction to Literary and Cultural Theory*. 3rd ed. Manchester UP, 2009.
- Brontë, Emily. *Wuthering Heights*. Oxford UP, 2009.
- Cecil, David. *Early Victorian Novelists: Essays in Revaluation*. Penguin, 1948 [1934].
- Chesney, Rebecca. “The Brontë Weather Project 2011–2012.” *Brontë Studies* 39. 1 (2014): 14–31.
- Davies, Stevie. *Emily Brontë: Heretic*. Women’s Press, 1994.
- . *Emily Brontë: Writers and Their Work*. Northcote, 2007 [2006].
- Garrard, Greg. *Ecocriticism*. 2nd ed. Routledge, 2012.
- Gezari, Janet, ed. *The Annotated Wuthering Heights*. By Emily Brontë. 1847. Belknap, 2014.
- Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. Yale UP, 1984 [1979].
- Gose, Elliott B. *Imagination Indulged: The Irrational in the Nineteenth-Century Novel*. McGill-Queen’s UP, 1972.
- Jalland, Pat. *Death in the Victorian Family*. Oxford UP, 1996.
- Lutz, Deborah. *The Brontë Cabinet: Three Lives in Nine Objects*. Norton, 2015.
- Matthew, Colin, ed. *The Nineteenth Century: The British Isles: 1815–1901*. Oxford UP, 2000.

- Miller, J. Hillis. *The Disappearance of God: Five Nineteenth-Century Writers*. University of Illinois, 2000 [1963].
- Schorer, Mark. "Fiction and the 'Matrix of Analogy'." *The Kenyon Review* 11. 4 (1949): 539-60.
- Stoneman, Patsy. "Catherine Earnshaw's Journey to Her Home among the Dead: Fresh Thoughts on *Wuthering Heights* and 'Epipsychidion'." *The Review of English Studies* 47. 188 (1996): 521-33.
- Thormählen, Marianne. *The Brontë and Religion*. Cambridge UP, 1999.
- Winnifrith, Tom. *The Brontës and Their Background: Romance and Reality*. Macmillan, 1977 [1973].